

女子大学生に妊娠と飲酒に関するリーフレットを 1回配布した場合の教育効果

ミムラアサミ* スドウ ノリコ カトウ ノリコ
三村明沙美* 須藤 紀子^{2*} 加藤 則子^{2*}

目的 内容を説明せずにリーフレットを一度配布するだけでも教育効果がみられるかどうかを評価した。

方法 F県にある某女子大学の家政学部栄養学科4年生(58人)と選択科目「健康と栄養」の受講者全員(81人)を対象に、非ランダム化比較試験を実施した。まず介入前調査として、妊娠中の飲酒についてどう思うか(妊娠中の飲酒に関する意識)、妊娠前後の飲酒についてどうしたいと思うか(妊娠中の飲酒に対する態度)、胎児性アルコール症候群(FAS)という病気を知っているか(FASの知識)について、選択肢でたずねた。1か月後に、介入群にはリーフレットを配布し、対照群には何も配布しなかった。介入から1週間後に再び質問紙調査(介入後調査)を実施した。リーフレットの配布と2回の質問紙調査は、教員の協力を得て、授業時間中に行った。リーフレットはアルコール・薬物問題に取り組んでいるNPOが作成したものであり、FASを予防するためには妊娠を考えた時から飲酒を避けることなどをすすめる内容となっている。

結果 有効回答率は83%であった。2群間で学年や現在の飲酒状況、妊娠やアルコールに関するこれまでの教育機会に有意差はみられなかった。介入群の79%がリーフレットを全部もしくは半分くらい読んでいた。妊娠中の飲酒に対する意識の変化については2群間で有意差はみられなかった。妊娠前後の飲酒に対する態度とFASの知識については、介入群において有意な改善がみられた。

結論 妊娠中の飲酒に対する意識の変化に2群間で有意差はみられなかったことは、回答者の75%が栄養学科の学生であったことや、介入前から8割近くが「絶対禁酒」と回答していた等、もともと意識の高い集団であったためと考えられた。一方、態度については、介入群では「結婚するなど、妊娠を望んだ時点でお酒を飲まないようにする」と回答した者が介入後は倍近くに増加したことから、リーフレットで学んだ内容を反映していると考えられる。FASを知った媒体も介入群の半数以上がリーフレットをあげていた。以上の結果から、授業の合間に情報提供としてリーフレットを配布するだけでも態度や知識を改善する効果が得られると考えられた。今回の対象者は7割以上が栄養学科の学生という、知識や関心の高い集団であったことから、一般住民に対しても、リーフレットの配布が効果的であるかは今後検証する必要がある。

Key words : リーフレット, 教育効果, 非ランダム化比較試験, 妊娠中の飲酒

* 母子愛育会愛育病院栄養科

^{2*} 国立保健医療科学院生涯保健部

連絡先: 〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6

国立保健医療科学院生涯保健部 須藤紀子